

表紙



まちくさ
AtoZ

重本 晋平

machikusa AtoZ

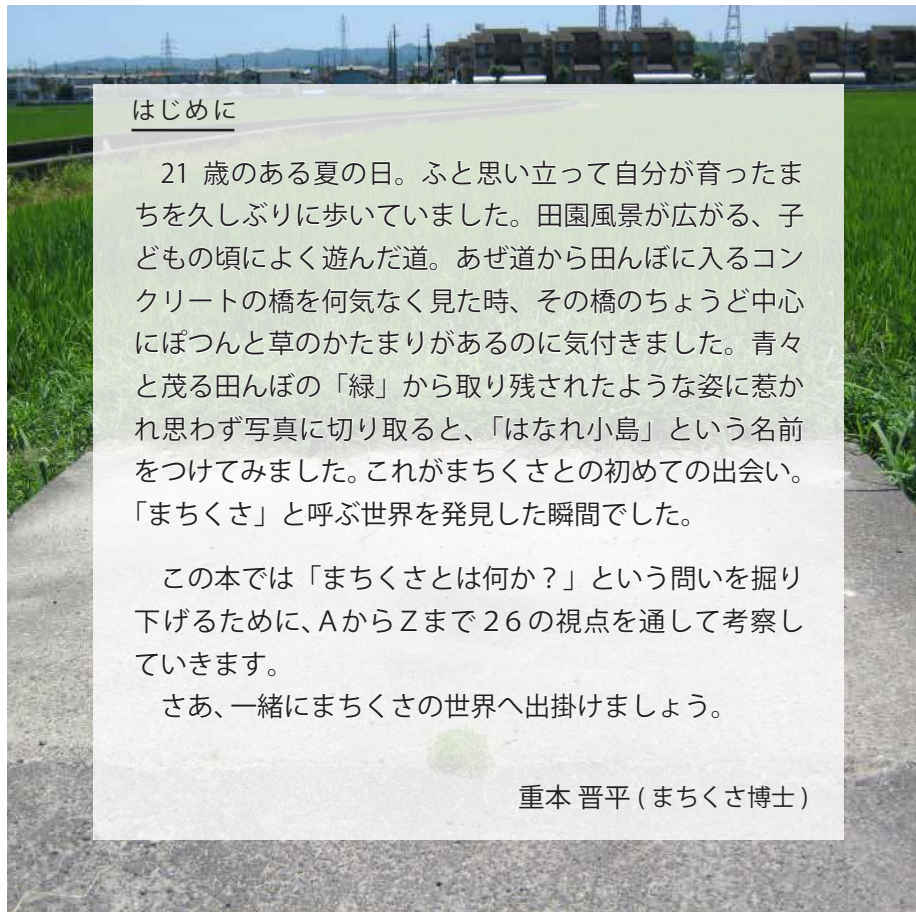
はじめに

21 歳のある夏の日。ふと思い立って自分が育ったまちを久しぶりに歩いていました。田園風景が広がる、子どもの頃によく遊んだ道。あぜ道から田んぼに入るコンクリートの橋を何気なく見た時、その橋のちょうど中心にぽつんと草のかたまりがあるのに気がきました。青々と茂る田んぼの「緑」から取り残されたような姿に惹かれ思わず写真に切り取ると、「はなれ小島」という名前をつけてみました。これがまちくさとの初めての出会い。「まちくさ」と呼ぶ世界を発見した瞬間でした。

この本では「まちくさとは何か？」という問いを掘り下げるために、AからZまで26の視点を通して考察していきます。

さあ、一緒にまちくさの世界へ出掛けましょう。

重本 晋平 (まちくさ博士)



まちくさとは

「まち」に生える「くさ」とその周辺（路肩のアスファルトや溝など）を写真に切り取り、そこへ独自の「名付け」と「分類」をすることで見慣れた風景を想像の力で塗り替えていく体験。

まちくさ図鑑



【ツキダシ科】

幽体離脱 out of body experience

コメント

ふわっと立ち上がった身体。
どっちが実物かわからず佇んでいる。

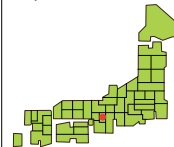
発見場所

奈良県奈良市

発見時期

2013年6月

map



日本まちくさ図鑑より
写真・文：重本 晋平
144 ページ (2014 年)

contents

a art 表現
 b book 本にする
 c communication コミュニケーション
 d dialogue 対話
 e entrance 入口と通路
 f fantasy 空想の世界
 g gap スキマ
 h history 人生と物語
 i imagination 想像力
 j journey 旅
 k kinder 子ども
 l landscape 風景
 m mitate 見立て

n name 名前
 o open source 公開する
 p play 遊び
 q question 問い
 r relationship 関係づける
 s sympathy 共感する
 t town まち
 u humor ユーモア
 v values 価値観
 w workshop ワークショップ
 x cross 交わる
 y yawata 京都府八幡市
 z zoom 虫の目と鳥の目



「自分を表現してください」と言われると、ちょっと身構えるけれど「目の前の風景に自分なりの名前(タイトル)をつける」というのも立派な表現になります。どこでも、誰でも、ちょっとした心の余裕があれば出来る表現のタネ。そういう意味で、まちくさは表現の入口にいるのかもしれない。

表現

「まちくさ」を表現するとき、本にするのが一番いいと思いました。それも手作りの。立派な図鑑がいい。本の良さは、それ自体が物語を持っているところ。表紙の手触り、ページをめくるごとに絵や写真、詩が立ち上がるあのワクワクする感じ。まちくさの豆本図鑑はポケットに入れて散歩にも携帯できますよ。

本にする

親子でまちくさの名付けを体験したとき、我が子の思わぬ感性にびっくりした。という声をよく聞きます。まちくさを介して会話が生まれることも。まちくさはコミュニケーションの手段として、実はとても大きな役割を果たしている。かも？

コミュニケーション



まちくさを探するとき、あちこち観察しながらフラフラと路地を漂うように歩きます。ゆっくり進んだり、たまに立ち止まったり。そんな調子で散策していると、だんだんまちと対話しているような気分になってくる。まちの呼吸に合わせるように、軽やかにステップを踏んで。シャルウィダンス？まちとダンスしてみませんか。

対話

子ども達が絵本を通して楽しい空想の世界に入っていくように。まちくさも想像の世界を冒険する入口になり、あっち(空想)の世界とこっち(現実)の世界を行き来する通路にもなっています。そしてその通路を通るとき、深く、豊かな物語が紡ぎ出されていきます。

入口と通路



まちくさを体験することは、ファンタジーの世界に触れること。自分の奥深くにしまってある想いを、想像力をフル稼働させて、勇気を出して表現してみる。これが思いのほか楽しい。何だか癒される。それは、一時だけであれ子ども時代に帰っているからかもしれないです。

空想の世界



「裂け目や断層や傷や孔のまわりで、ひとは夢みたり考えたりする」作家のジルベール・ラスコーの言葉。アスファルトのひび割れ、石垣、溝、まちのスキマをよくよく観察すれば、そのかたちがユーモラスかつ多種多様であることに気づきます。そして、まちのスキマが多様であるほど、まちくさはイキイキとした姿を見せてくれるのです。

スキマ



history(人生)とstory(物語)は語源を辿ると同じ意味に行き着きます。人はそれぞれ自分にしか描けない物語を生きているのではないのでしょうか。まちくさの名付けを見れば、その人の生きてきた歴史や職業、価値観が面白いほどよくわかります。まちくさは、名付けたその人自身を映し出す鏡のようなものかもしれない。

人生と物語

想像力は誰もが生まれながらに与えられた力。ただ、なかなかその力に気づけないことも多いです。想像力を持ってさえいれば、どんな世界も創れるし、どんな場所にだって飛んで行けます。まちくさから広がる想像の世界には、現実をも変えていく力がある。僕はそう信じています。

想像力



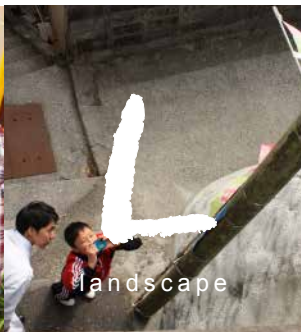
沖縄から北海道まで、日本各地のまだ見ぬまちくさ達を探す旅に出ました。日本まちくさ図鑑を作るために。観光名所には振り向きもせず、ひたすら民家の隙間を縫って歩く。まちくさハンターになりきり、路地というジャングルを探検していく。まちくさの旅は、壮大な冒険のようでいて、身軽な散歩のようでもあります。

旅



子ども達はまちに出れば無敵になります。目に映るもの全てが興味の対象。「あっちにも面白いもんあんで!」もはや、まちくさどころではないのです。でも、それでいいと思う。そんな子ども達のまっすぐな眼差しに出会うたび、忘れてはいけない大切なことを教えてもらっている気がします。

子ども



里帰りした時の体験。子どもの頃から見慣れていたはずの風景が小さくしぼんでしまったように見えました。大人になって目線の高さが変わったという単純な理由だけではない。決定的な違和感がありました。その違和感を解き明かすために、まずは「子どもの目」に戻してみることにしました。

風景



「何に見える?」まちくさはこの問いかけからはじまります。顔に見える。動物に見える。楽しく散歩してる家族に見える。見え方はみんな違います。100人いれば100通り。それが面白い。かの千利休も見立ての手法を用いて茶の湯の世界を作り上げました。見立てるって、自分の五感を通してこの世界を捉え直すことかもしれません。

見立て



名前は誰にでもあります。名前を呼ぶことは、その対象に愛情を注ぐこと。まちくさは自分で「名付け」をします。あれやこれや悩んで名付けたまちくさには、不思議と愛着が湧いてくるものです。まるで命が吹き込まれたように。世界でたった一つの名前を与えられたまちくさも、きっと喜んでるんじゃないかな、と思うのです。

名前



まちくさは、やり方さえわかれば誰もが簡単に楽しめる遊びです。遊び方は工夫次第で無限大に広がっていきます。「まちくさ」を合言葉にみんなが集うような広場があってもいい。伝承遊びのように人から人へ伝わっていく。まちくさがいつかそんな存在になればいいなあと思っています。

公開する



play



question



relationship



sympathy



town



humor

これまで、他分野のアーティストといろいろなコラボレーションをしてきました。「まちくさ体操」「まちくさのうた」「まちくさと菓子」「まちくさ陶器」どれも最初は遊び心からはじまりました。遊びには答えはないし、間違いないのです。ワクワクするような好奇心さえあればいいと思っています。

遊び

何気ない身近な風景の中に「まちくさ」という存在を発見して早13年が経ちました。今でも、まちくさが何なのかを自分に問い続けています。その「謎」をずっと研究しています。この研究は僕の人生そのものと言えるかもしれません。また人生のテーマを持つことで、自分の価値観を知ることできました。きっと、おじいさんになっても、問い続けているでしょう。

問い

「つけものクローバー」という名付けをした女の子がいました。まちくさを探す前日、お母さんが漬物をつけていた様子を見ていたのが、クローバーと合わさったようです。化学反応のような名付け。女の子は自分の内にある世界と、目の前の現実世界をしっかりと関係づけていました。変だけど、昔からそこにあったかのような名前です。

関係づける

共感することは認め合うことです。まちくさの世界に間違いはありません。間違いがないので、そこには人それぞれ自分の世界がどんと現れます。そして、その世界をどこまでも肯定し合います。認め合う、というところをスタートラインにすると、想像(創造)の可能性は果てなく無限に広がっていきます。

共感する

まちくさは「まち」にある「くさ」。そういう意味では日本、いや世界のどんなまちを歩いても、そこにはきっと「まちくさ」がいるでしょう。まちがあり、人の営みがあれば、そこにそっと寄り添うように佇んでいる。まちくさは、そんな遠い親戚のような存在なのだと思います。

まち

「人と人はザラザラとこすり合うのではなく、いい心持の潤滑剤の役目を果たす言葉を持たなければならぬ。それがユーモアである。」と作詞家の阿久悠は語りました。まちくさの名付けで生まれる言葉(名付け)もユーモアが命。真面目すぎでは面白くない。みんながクスッと笑えたら大成功です。

ユーモア



何が好き? どういうふうに生きていきたい? 人生で何に価値を見出すかは人それぞれ。僕にとってのそれは「まちくさ」かもしれません。そして、まちくさを通じて同じ価値観を持つ仲間とたくさん出会えました。それが何よりの財産です。

価値観

まちくさは一人でするのもいいけれど、誰かと一緒にやるともっと楽しいです。ワークショップではみんなでまちくさを探して、発表して、作品まで作ります。「何に見える?」「こんな名前つけた」家族と、友達と一緒にぜひまちくさを探してみてください。お互いの知らなかった一面がきっと見えてくるはず。

ワークショップ

まちくさという存在は、何かと何かクロスするところ、交わる場所にあると思っています。また、交わることのない領域を結びつける、引き合わせる磁石のような役割も担います。それは白でもなく、黒でもない、いつも間(あいだ)にたつ中立の視点です。

交わる

京都府八幡市は初めてまちくさと出会ったまち。そして、僕が育ったまちでもあります。このまちを歩くと、小学校からの帰りによく寄り道をして遊んだことをつい昨日のように思い出します。思えばあの道草の体験は、この世界と自分とを結びつけてくれた、かけがえない時間でした。

京都府八幡市



まちくさを探するとき「虫の目」になるのがいい。何気ない日常風景も、クローズアップしてみると、そこには新鮮な世界が広がっています。そしてもう一つ大切なのが「鳥の目」という視点。遙か上空からまちを見下ろすような俯瞰の目。この二つの目を持てば、日常は非日常へと様変わりします。

虫の目と鳥の目

このまちくさに名付けをしてみてください。あなたなら、どんなタイトルをつけますか?

おまけ(名付けてみよう!)

イイね!





【はなれ小島】発見場所：京都府八幡市

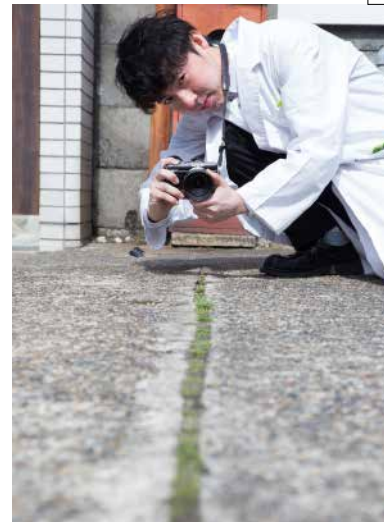
初めて発見したまちくさ。デベンのような丸い形の小島が愛らしい。手前に広々とした田園と用水路、奥に目をやると団地、工場、その向こうになだらかな山並みが見えます。後になって、この風景には八幡市の全てが凝縮されていると思うようになりました。

プロフィール

重本晋平（まちくさ博士）

1985年生まれ京都府八幡市出身。2007年に「まちくさ」を考案。同時期より、まちくさの視点を誰かと共有したいという思いで「まちくさワークショップ」を開始。自らまちくさ博士となり各地の小学校で出張授業を行うように。現在は拠点を京都府綾部市に移し、自然に囲まれた環境で農ある暮らしを試みながら、新たなプログラムや作品制作に向けて動きはじめています。

詳しくは→<http://machikusa.com>



さいごに

僕は「まちくさ」という言葉に導かれるようにこれまでの人生を歩んできたように思います。そんなまちくさが、これから先、他の誰かにとっても大切な

言葉になれば、これほど嬉しいことはないです。そんな思いを込めて、この本を作りました。最後まで読んでいただきありがとうございました。

まちくさ AtoZ 発行日/2020年1月11日 文・写真/重本晋平 表紙/松田製本所 協力/今まで出会った皆様
発行/まちくさ研究所 〒623-0005 京都府綾部市里町大坂 22 TEL.090-1894-6449(重本)